

論文掲載と投稿者の学歴・研究経歴の相関関係について

李 芙鏞（江原大学校）

一。はじめに

本稿は、学術雑誌における投稿者の論文掲載の当落に影響する要因について分析するために、韓国日本言語文化学会が発刊する『日本言語文化』の文化分野を投稿者要因から分析し、そこから現れる投稿者の傾向を捉えようとするものである。分析範囲は、『日本言語文化』第30輯から第49輯までにし、その期間に文化分野に投稿されたすべての論文を研究対象とする。

投稿者が提出した論文の審査点数に影響するものとしては、論文の形式や内容など、さまざまな要因が考えられるが、審査点数というのは、何よりも論文の質的水準によるべきものであると考えられる。そこで、本稿では論文の質はそれを執筆した投稿者の研究力を反映していると前提した。その上、論文投稿者の研究力に影響を及ぼす要因として学歴と研究経歴という二つの基準を設けた。その他、論文の掲載に影響する要因としては、審査者要因もあるだろうが、本稿では、範囲を限定して、投稿者要因について分析していくことにする。

今回の調査のために、韓国日本言語文化学会のご協力を得て匿名の基礎データの提供を受けたことを併記しておく。

二。「文化」分野の論文の現状

本格的な分析に先立ち、本稿において扱う範囲をもう一度確認しておきたい。今回の調査では5年間という期間を設定し、2015年度から2019年度までに出版された『日本言語文化』第30輯から第49輯までを対象とする。

まず、投稿された論文の数について考えてみよう。次の表は、『日本言語文化』の「文化」分野の論文の投稿数を年度別に分けてまとめたものである。これは掲載の可否に関係なく、投稿されたすべての論文を数えた数字である。ただ、有意味な統計分析を行うため、同一著者が同一論文を繰り返し投稿した場合は、一篇としてカウントした。

年度	2015	2016	2017	2018	2019	合計	平均
輯	30～33	34～37	38～41	42～45	46～49	—	—

投稿数	49	44	40	46	47	226	45.2
-----	----	----	----	----	----	-----	------

<表 1>年度別「文化」分野の投稿数

5年間の論文の投稿数の合計は、全226篇に渡っている。この数字は『日本言語文化』が日本研究分野の学会誌として認められ、活発な研究成果の発信の場になっていることを示してくれる。毎年少なくとも40篇以上、多ければ約50篇に至る多くの論文が投稿され、平均すると毎年45.2篇の論文が投稿されているわけである。

次に、投稿された論文を審査委員会の審査に掛けて、その結果、合格し掲載された論文数は次の通りである。参考までに、『日本言語文化』の審査委員は第39輯までは3人制であったが、第40輯から現在までは2人制を維持している。

年度	2015	2016	2017	2018	2019	合計	平均
輯	30～33	34～37	38～41	42～45	46～49	－	－
掲載数	33	29	27	26	27	142	28.4
脱落数	16	15	13	20	20	84	16.8

<表 2>年度別「文化」分野の掲載論文数

掲載された論文の合計をみても、投稿された論文226篇の中、審査を通ったのは142篇だけであり、論文審査の過程でかなり多くの論文が脱落していることが読み取れる。

さらに、投稿された論文の合格ラインについて考えてみよう。『日本言語文化』への投稿論文は、審査結果の点数の高い順に合格と脱落が決められる。次の表は、各輯の合格ラインを調査し、さらにそれを年度別に平均したものである。

年度	2015	2016	2017	2018	2019
輯	30～33	34～37	38～41	42～45	46～49
合格ライン	35.4	37	40.75	40.1	38.5

<表 3>年度別「文化」分野の合格ラインの平均点

これによると、2015年から5年間の合格ラインの平均は、2017年がもっとも高いが、全体の傾向としては35～40点あたりを占めている。論文審査で受けられる最高点が45点であることを考えると、合格ラインはかなり高い点数台を形成していることが分かる。

上の基礎データを通じて、論文数と合格ラインに対する大まかな傾向が観察されるが、それを投稿者の学歴や研究経歴という二つの要素に分けて考察してみよう。

三。掲載論文の著者の学歴

投稿者の学歴という要因を調査するため、まず、博士号の取得を基準にし、その上、学位取得の国によってグループを分けた。もちろんどの国で学位を取ったかは研究者の研究力をはかる絶対的な指標ではないが、外国語という特殊性もあり、一応日本という「現地」とそれを区分した。

日本への留学を経験し、日本の大学で学位を取得した研究者を<Ⅰ>グループとし、次に、韓国の大学で学位を取得したグループを<Ⅱ>グループと名付けた。学位取得を基準にしたもので、大学院に在学中の場合は、<Ⅲ>グループと呼ぶことにする。少数ではあるが、<その他>には韓国と日本以外の第三国で学位を取得した場合を入れた。次はグループ別の掲載論文の数を年ごとにまとめたものである。

年度	2015	2016	2017	2018	2019	合計	平均
輯	30~33	34~37	38~41	42~45	46~49	-	
Ⅰグループ	16	20	17	14	15	82	16.4
Ⅱグループ	12	5	7	4	9	37	7.4
Ⅲグループ	4	4	3	6	3	20	5.0
その他	1	-	-	-	-	1	0.2
掲載数	33	29	27	26	27	142	28.4

2015年の<Ⅰ>グループの掲載論文数は2015年度から2019年度までにそれぞれ14~20篇が掲載され、平均すると16.4篇の論文が掲載されている。それに比べて<Ⅱ>グループの掲載論文数は4篇から12篇までで、平均すると毎回7.4篇前後の論文が掲載されている。大学院在学中の学生が執筆者である<Ⅲ>グループの論文掲載数は3~6篇で平均5.0篇の掲載を見せる。

以上のような数字から、日本の大学で博士学位を取得した<Ⅰ>グループの審査通過率が高いことが知られ、韓国の大学で学位を取得した<Ⅱ>グループの掲載論文数は前者の半分以下であることが分かる。つまり、掲載論文の著者を学歴によって分析してみると、<Ⅰ>グループの研究活動がもっとも活発であり、掲載論文の数も多いことが確認される。

四。掲載論文の著者の研究経歴

研究者の研究経歴は、研究年数によって積み重ねられていくことを前提とした。その上、出生年度を基準に次の二つの基準に分けて、その傾向を分析した。まず、1950年から1969年の間に生まれた研究者を＜Sグループ＞とし、1970年からその後の1980年代、1990年代生まれの研究者を含めて＜Jグループ＞とした。

年度	2015	2016	2017	2018	2019	合計	平均
輯	30～33	34～37	38～41	42～45	46～49	-	-
Sグループ	12	14	13	9	8	56	11.2
Jグループ	21	15	14	17	19	86	17.2
掲載数	33	29	27	26	27	142	28.4

＜表 4＞研究経歴による論文掲載数

＜Sグループ＞と＜Jグループ＞を比較してみると、＜Jグループ＞の方が論文掲載数の高いことが読み取れる。年度別の平均値は前者が11.2篇、後者が17.2篇である。その年齢を分かりやすく示してみると、例えば、1970年に生まれた研究者は、2015年に35歳前後になる。このように年齢を考慮すると、博士学位を取得し始める30代後半から40代に掛けた年齢の研究者が論文執筆や研究活動に熱心であることが推定される。

VI. おわりに

今回の調査では、『日本言語文化』第30輯から第49輯までの掲載論文を中心に、学歴、研究経歴という要素からその傾向を考察してみた。

大まかな結論として、学歴要因においては、いわゆる日本留学派が韓国国内派より論文を多く掲載していることが察せられた。ただ、もっと正確な分析のためには、日本や韓国の中でも大学のレベルを細分化して考察を行う必要があると考えられる。

次に、研究経歴要因においては、就職して安定した立場にいるシニアの学者より、若手研究者の方が活発な研究活動を見せていた。これは学位を取ってから就職活動に励んでいる若手研究者、または、大学と学会で働いている若い専任教員の活動を見せる数値かもしれない。しかし、より詳しくは、例えば10年単位で世代を分けた細密な分析が要求され、今回の調査はさらなる分析のための資料として活用していきたい。

＜参考文献＞

韓国日本言語文化学会 編『日本言語文化』第30～49輯、韓国日本言語文化学会